

正覺坊

豊島与志雄

青空文庫

しょうかくぼう 正覚坊 というのは、海にいる大きな亀かめのことです。地引網じびきあみを引く時に、どうかするとこの亀が網にはいつてくることがあります。すると漁夫りようし達は、それを正覚坊がかかったと言つて大騒ぎをします。正覚坊が網にかかるときつと大漁がある、と言われているのです。漁夫達は皆集まつて正覚坊をとり巻き、近所の家から酒をたくさん取り寄せて、それを正覚坊に飲ませます。正覚坊は酒が好きです。頭が赤くなるほど酒のごちそうになつて、それから海に放されます。うれしそうに頭を打ち振りながら、波の上を沖の方へ泳いで行きます。漁夫達はその姿を見送つて、残りの酒を皆で飲みながら、大漁節というおもしろい歌を歌つたりなんかして、次の大漁を祝います。

そういう正覚坊について、おもしろい話があります。

ある海岸の漁夫村に、平助へいすけという一人者の漁夫がありました。昔は沖遠くまで漁に出たりなんかして、強いたくましい若者でしたが、家族の者はみんな死んでしまい、ひとりつきりで年は取りますし、後には、岸辺きしべの小魚や川の魚などを取つて、その日その日を送っていました。そしてこの平助は、酒が大変好きでした。いくら飲んでも酔ったことがありませんでした。あまり飲むと身体からだにさわるよと人に言われても、彼は平気でました。酔う

から身体にさわるので、俺われのように酔ったためしのない者はいくら飲んでも大丈夫だいじょうぶだ、と彼はいつも言っていました。始終しじゅう貧乏をしながら、少しお金があると酒ばかり飲んでいました。村の人達は彼のことを、正覚坊しょうかくぼうだとあだなしていました。

ひどい暴風雨あらしの晩でした。平助はいつものように徳利とくりを前にすえて、ひとりつまらなそうに酒を飲んでいました。すると、表の戸をことりことり叩くものがあります。初めは風の音かと思っていきましたが、それが何度も続くものですから、平助も少し気になりました。彼は杯さかずきを前に置いて、表の方をふり返りながらたずねました。

「誰だい？」

何の返事ありませんでした。耳をすますと、風と雨との音に交まじって、やはりことりことりと戸を叩いています。

「何か用事かね」と平助はまたたずねました。

それでも返事ありませんでした。しまいに平助は、仕方しかたなしに立ち上がって、表の戸を開いてみました。さつと風と雨とが吹き込んで来たかと思うまに、闇の中から、まっ黒な大きなものが、のそりのそりとはい込んできました。平助は腰こしをぬかさんばかりに驚きました。よく見ると、それは畳たたみ半分ほどもある大きな正覚坊でした。

正覚坊だとわかると、平助は初めてあんどしました。いきなり表の戸をしめて、正覚坊を部屋の中に連れて来ました。正覚坊はそこにぐったりとなつて、喉のどもと二元をふくらましながら、はあはあと息をきらしてらるらしいのです。

「おい、どうしたんだい」と平助はたずねました。

しやうかくぼう
正覚坊

はじつとしています。いくらたずねても黙っています。それもそのはずです、

亀かめに口がきけるわけはありません。平助はそれに気付いて、ひとりで声高く笑い出しました。

た。そしてそれはきつと沖の方から暴風雨あらしに吹きつけられて来たのだろう、と考えました。

それで、元氣をつけてやるために、徳利とくりの酒を茶碗ちわんについて差し出しました。すると、正

覚坊はその中に首をつき込んで、きゅーつと一息ひといきに飲み干しました。平助はうれしくな

りました。縁起えんぎがいいと言われている正覚坊が、向こうから訪ねて来てくれたんですもの、

漁夫りやうしとしてこれくらい愉快ゆかいなことはありません。平助はすぐに、ありったけのお金で、

酒をたくさん買って来ました。そして二人で飲み始めました。正覚坊もだんだん元氣にな

つてきまして、しまいには酔っぱらつて部屋の中をおかしな格好ではい廻ります。亀踊り

をやつてるのでしよう。平助も酔っぱらつて首や足を振り動かして正覚坊にちようしを

合あわして、歌を歌つたり手拍子てびやうしをとつたりしました。

そのうちに、酒はなくなり、夜はだんだんふけてきますので、とうとう、平助はそこに倒れたまま眠ってしまいました。

朝になってふと眼を覚ますと、平助はちゃんと布団ふとんを着て寝ているのでした。見ると、正覚坊も同じ布団の中に、ぐうぐう眠っていました。平助が起き上がると、正覚坊も起き上がって、きよとんとした眼をしています。暴風雨あらしはもう静まっていました。

平助は正覚坊の背中を撫なでながら、さてその始末しまつに困りました。家に置いておけば、自分が漁りように出た不在るす中に、村のいたずら小僧こそうどもからどんな目にあわされるかわかりません。まさか床の下や押入れおしいに一日隠しとくわけにもゆきませんし、また、始終しじゆう連れて歩くわけにもまいりません。それかつて、このまま海へ逃がしてしまうのも、何だか心残りです。平助はいろいろ考えていましたが、ふと名案めいあんが浮かんできました。村の側を流れてる川が海に注そそぐという川口のそばに、大きな入江いりえがありました、深い深い沼を作っています。平助はそこに正覚坊しょうかくぼうを入れてやろうと考えました。川口から海へ逃げて行けば仕方しかたないけれど、こういうおとなしい正覚坊だから、あるいは沼の中心にいて時々遊びに来てくれかも知れない。

「お前をよい所に住ましてやるぞ」と平助は言っけきかせました。「深い広い沼だから安

心だ。海に出るとまた暴風雨にあうから、おとなしく沼の中に住んでいろよ。そして時々遊びに来いよ。酒を用意しておいてやるぞ」

正覚坊はその言葉がわかつたかのように、頭をこくりこくりやってみせました。

平助は人に見つからないようにして、正覚坊をつれて沼へやって来ました。正覚坊は一つお辞儀じぎみたいなことをして、沼の底へ沈んでゆきました。

平助はうれしくつてたまらないような気がしてきました。元気いっぱい漁に出ました。大層たいそうよく魚が取れました。晩になると、魚を売ったお金で酒を求めて、正覚坊が来るかも知れないと待つてみました。

晩遅くなつてから、戸をことりことりと叩くものがあります。平助は半信半疑はんしんはんぎで戸を開いてやりますと、正覚坊がちゃんと来ているではありませんか。平助の喜び方ったらありませんでした。夜ふけるまで二人で酒を飲んで、それから一緒に寝ました。朝になると、正覚坊は沼へ帰つてゆきました。

それからは、毎晩平助の家へ正覚坊が遊びに来ました。二人で楽しく酒を飲みました。ところが、元来がんらい正覚坊しょうかくぼうとあだなされてるくらいの平助と、本物の正覚坊とが一緒になつたものですから、いくら酒があつてもすぐになくなつてしまいます。平助は無欲で

すから、お金をためようなどとは思いませんでしたけれど、正覚坊と二人で充分に酒を飲めないのが残念でした。ことに漁りようが少ない時なんかは、少しばかりの酒を前にして、しおれ返つてしまいました。

平助が困つたように考え込んでるのを見て、ある晩、正覚坊は何と思つてか、そこにあつた投網とあみをしきりに引つ張ります。それを見て平助は、これは投網を打ちに行けというんだなと悟さとりました。

平助は正覚坊を連れて、投網やりようで夜漁に出かけました。すると何しろ正覚坊が魚を追い廻して来てくれますので、その所へ投網を打つと、はいることははいること、またたくまに持ちきれないほど取れました。

そういうふうにして、平助と正覚坊とは、充分に酒を飲むことが出来ました。一晚漁に行けば、二三日分の酒代さかだいはわけなく稼かせげるのでした。

けれども、あまり酒を飲んだのがいけなかつたのです。翌朝まで正覚坊は酔っぱらつて、沼の底へもぐるのも忘れて、岸で昼寝をすることがいくともありました。それを村の人達に見られたのです。

沼のほとりで大きな正覚坊が眠つてるのを見たとき、一人の者が言い出しました。すると、

俺おれも見た俺も見たと、いくにんも見た人が出て来ました。それならばひとつ生捕いけどりにしてやろう、ということになりました。縁起えんぎがいい奴やつだから村中で池の中に飼かってやろう、という相談がまとまりました。

それを聞いて、平助は心配しました。池の中に飼かわれると、一緒に酒を飲むことも出来なくなるわけです。その上、平助は若い時荒海あらかみの上を乗り廻まわしたことがあるだけに、正覚坊しやうかくぼうがもし狭苦せうこしい池の中に飼かわれたら、さぞつらい思いをするだろうと考えました。どうしても正覚坊しやうかくぼうを村の人に生捕いけどらせてはいけません、しかし、どうもうまい方法が見当あたりませんでした。

そうこうするうちに、いよいよ明日は村中で沼に網を入れるという、その前夜になりました。平助は仕方しかたなしに、村の人達をだましてやろうと考えました。そして、正覚坊しやうかくぼうへはよく言いってきかして、その晩二人で大きな石を沼の中に沈しずめ、正覚坊しやうかくぼうは沼の岸辺きしべの真菰まごもの中に隠かくれました。

翌日になると、村の漁夫りようしたち達は朝早く集まって、沼へ大きな網を入れました。大変重たおもいものがかかりました。そら正覚坊しやうかくぼうがかかったと言いって、総掛そうががりりで、引き上げてみますと、大きな石ではありませんか。皆はがっかりしました。平助一人が心で喜びました。

ところが漁夫達の中に一人の物識ものしりがいまして、そういう沼に住むくらいの正覚坊だから、きつと石に化ほけたのに違ちがいがない、と言いい出しました。人々もなるほど考えました。そこで、その石を正覚坊になすのが問題となりました。酒をぶっかけたらいいかも知れない、と一人の男が言い出ししました。早速さつそく酒を取り寄せて、石にぶっかけてみました。けれども、元々もともとからの石ですから、酒をかけたくらいで正覚坊になりようわけはありません。

「なかなかしぶとい奴やつだ」とも一人の男が言いました。「この上は行ぎようじや者に祈いのつてもらおう」

一同はそれに賛成しました。幸いとその村の近くの町に、狐きつねつきを落おしたりなんかする行者がいました。それがすぐに呼よばれてやまって参まりました。

村中はお祭りのような騒さわぎでした。御幣ごへいをこしらえるやら、色々な品物そなを供そえるやらして、いざ御祈ごきとう禱とうとなると、村中の人が男も女も子供も集あまって来きました。行者はまっ白しろな着物をつけて、御幣ごへいを打ち振り打ち振り、魔法めいた文句を口の中で唱となえながら、しかつめらしく御祈ごきとう禱とうを始めました。けれども、石は何としても石です。正覚坊しょうかくぼうになりつこはありません。

そのうちに、額ひたいから汗を流して一生懸命に祈いのちっていた行者ぎようじやは、はたと祈りをやめて言いました。

「皆さん、これは正覚坊が化まけたのではありません。元々もともとからの石です」

村の人達はあつげにとられて言葉もありませんでした。やがてその気持ちいきもちが静まると、正覚坊に対して腹が立つてきました。この上はぜひと本物の正覚坊を生捕いけとつて、仕返しかえしをしてやらなければならぬ、と口々に言い立てました。正覚坊が化けた石だと誰かがよけいなことを言ったのなんかは、もう忘れられてしまっていました。

けれども、その日はもう夕方になりましたから、翌日あした沼狩ぬまかりをすることにして、一同は罵ののり立てながら引き上げました。

それらのことを、平助は始終しじゆう胸をどきつかせて眺めていました。晩になると、困ったことになったと思案しあんにくれました。実はこうこうだと今更いまさら言い出したところで、村中の人の気が立つてる折りですから、それこそ、正覚坊ばかりではなく、平助までひどい目に逢あわされるに違いありません。こうなった上は、夜のうちに正覚坊を逃がしてやるより外しかた仕方がないのです。

平助は死ぬような思いで、きつと決心をいたしました。酒をたくさん買って置いて、正

覚坊が来るのを待つていました。正覚坊は平気な顔をして、いつもの通りやって来ました。二人は酒を飲み始めました。しかし平助は気がめいりこんでしまいました。終には涙をぼろぼろ流して、正覚坊の頭を撫でながら、よく訳を言つてきかせました。

「そういう訳だから、もうお前とは別れなければならぬ。名残惜しいけれど仕方がない。沖に出たら、暴風雨やなんかに気をつけて、身体を大事にするがよい。亀は万年も生きると言つてあるから、お前も長く生きて、時々俺の事を思い出してくれよ」

正覚坊も、平助の言葉がわかつたかのようにうなだれてしまいました。涙をこぼすまいとつとめているように眼を瞬きました。

そして、酒もなくなり、夜明けもまぢかになつた頃、平助は正覚坊を連れて海に出ました。西の方の空に三日月が掛かつていて、海の面がぼーと明るくなつていました。

「それじゃこれで別れるから、達者に暮らせよ」

そう言つて平助は、正覚坊の頭を撫でながら、沖の方へ放してやりました。正覚坊は何度もお辞儀をして、後ろをふり返りふり返り泳いで行きました。その姿が波の向こうに見えるなくなつてからも、平助はぼんやりそこに立つていました。

やがて、早くも夜が明け放れて、村の人達は沼狩りを始めました。しかしもう正覚坊が

いなくなつた後のことです。いくら狩り立てても取れません。一同は諦めて帰って行きました。

それからというものは、平助はまるで氣抜けのようになりました。そして、毎日沼のほとりに出ては、かの大石を正覚坊の姿に刻み始めました。平助が正覚坊に憑かれたという噂がぱつと村中に広がりました。しかし平助は、実は真面目で一生懸命だったのです。

正覚坊の像がいよいよでき上がった夕方、平助は村の網元の家へ行って、その御隠居に、一部始終のことをうち明けました。御隠居はびつくりしました。なおその上びつくりしたことには、翌朝平助は死体となつて沼に浮かんでいました。酒に酔つたあまり溺れ死んだのか、あるいは身を投げて死んだものか、誰にもわかりませんでした。けれども、その前の晩、正覚坊の像にもたれてしくしく泣いていた平助の姿を、月の光りで見たとする者がありました。

村の人達は、網元の御隠居から平助の話をかきかぜられて、大變氣の毒がりました。そして、平助の死体を沼の岸に埋めてやり、その上に正覚坊の石像をのせて祭りしました。今では、その沼を正覚坊沼と言つていまして、平助が刻んだという正覚坊の石像も残っています。沼の魚はみんなその石像に供えたものとして、誰も取らないことになつていま

す。海で大漁がありますと、村の人達はそこに集まって大漁祝いをいたします。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

正覚坊

豊島与志雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>